



子供讃歌 (五)

倉橋惣三

四繪の子供

1 ルドウイヒ・リヒター

その前から、彼は子供を主題とした小説、子供をうたつた詩歌俳句、子供を描いた繪畫、子供をあらわした塑像彫刻を好んで漁つた。それによつて、彼の藝術趣味と子供好きとが、あわせ満足させられた。極めて嚴密にいえば、その主題本位は、眞に藝術に徹する途ではないかもしれない。その點で彼の藝術愛好は、その程度のものだといわれても仕方がないかもしれない。それは、彼が美術展覽會にゆくとき、いつでも、子供を描いた繪の前に長く立止つては、折角同じ室にある他の優れた作品を見落し、人の評判を思い出して、あと戻りして見るといつたことにもなつた。恥しい話である。が、だといつて、子供さえ出ていれば、どんなまづい歌でも繪でもいゝという譯では決してない。少くも、彼がほんものゝ子供において見るもの、自分では見つけられないところを見せて呉れるだけの藝術でなければ黙殺し或は侮蔑する。しかもそういう侮蔑の場合が極めて多い。彼は、學問だけでは見ぬき得ない『子供』を藝術家という彼の最尊敬する人々によつて見せて貰いたいと希つてゐるのに、それを裏切られる時には、失望位のことではあきらめられない。そこで侮蔑し唾棄する。その反對に、彼の青年時代の兒童研究が、東西の優れた藝術家によつて助けられたことは數限りないといつていゝ。殊に、子供というものを深く想わせられ、美しく味わせられ、生々と捉えさせられたことにおいて。その中には誰もよく知つてゐるレイノルズ、ミレー、ムリロー、ツンプツシュ等

々があつたが、最強く當時の彼の心を捉えたのは二人の畫家であつた。

或る春の日、内村先生が彼に一枚のドイツ版の色刷畫を下まつた。

一季は早春。山に近い丘の上、萌えそめる若草の上で五人の女の子がいる。その一番右の一人——寛かな野遊び衣に右肘をついて暢び／＼と投げだした足は、ふんわりと草に埋んでいる。何を見ているのかうつとりとした兩の視線は右手に持つた一輪の野花に注がれているでもない。茂みの蔭の石の上の小鳥に向けられていながらも、その目の遙に遠くゆくところを巡れば、丘つゞきの廣やかな眺めが畫幅の外にひろげられる。中の二人——花輪を組んで頭にのせた快活そうなのが、友達の肩へ手をかけて何事か面白そうに語れば、手をかけられた方は、つゞましそうに花を嗅ぎながら其の話を聴いている。そのうしろに一人だけ立つている子——編んで垂れた長い髪の毛がひら／＼と風を舞うて、中でも一番年下らしい頬の色の愛くるしさ、その張り上げる歌の聲が畫の中にも響き渡つている。一番左の一人——丘の端に腰をおろして、しづかに彼方の谷を眺めている。青い連脈を越えた遠い峯には、雪がまだ美しく僅に残つて、追い追らざる春の寛かさを示している。少女らのいる丘がだら／＼と右へ下がつて、ちよつと小徑らしくなつてゐる處には、こゝにも幼い子供らの一組が、柔和そうな一人の老婆を圍んで遊んでいる。そこへ坂下から羊の群が来る。長い杖をもつた牧童が来る。徑を隔てた向い側の丘の上の森の傍には、苔むした小堂があつて、その屋根の頂きの小さい十字架が、明るい春の光に映えて見える。そのほかに、蒼い空に浮ぶ白い雲、ゆるやかに高く舞う鳥の群、長閑に霞む籠の色、少女らの傍にいる一匹の小狗までが、全幅の平和、快活の氣に相調和して、まことに心ゆく暢びやかさの上に、しかも何處までも靜かな邑の午後のつゞましさ、そよぐ風と共に畫面に満ち漂うている。

——ルドウイヒ・リヒターの傑作、*Auf Dem Berge* (山の上)である。彼が如何に陶然としてその畫に酔つたかは、その當時彼が書いた此の若い文章に溢れている。これが、彼がリヒターの作に接した最初であり、リヒターに心酔しだした初めであり、世の中にこんなにもきよく、清く、潔く、聖く、いづれの字をあてべきかを知らぬ、こんなになごやかに子供を描いた藝術のあることを知つた初めであつた。彼は朝夕にその畫を眺めると共に、リヒターの自叙傳 (*Lebenserinnerungen von Ludwig Richter*) と、モーンの評傳とによつて此の畫家について詳しく知ろうとした。その上、丁度その頃一高のドイツ語の講師であつたグーデル氏が、リヒターの畫を澤山藏していられたのを見

せて貰うことができたのは、この上もない幸であつた。かうして彼のリヒターに對する愛着は、その後彼がドイツにいた間のリヒー蒐集にまでづつと長く続いた。

リヒターの大小澤山の作——實に澤山の——の中には、いつでもといつていゝ程子供が描かれている。それを假りに大別すれば(1)子供の生活そのものを描いたもの、(Kinderleben)として集められる類や、幾つかの童話集の挿畫もこの中に入る、(2)田園風景畫の中に子供のいるもの(リヒターの藝術的傑作は田園生活の自然を描いたものに多い)、(3)宗教畫の中に子供の配せされているもの(リヒターは篤信の心を畫面の隅々に漂わせて、所謂宗教畫の狭い範ちゆうに入らない、謂わば宗教的ふんいき藝術というべきものを澤山描いている)となし得るが、そうした區別に拘わらず、リヒターは、畫筆をとるといつのまにか、子供を描かずにいられない畫家といつた風である。リヒターの畫には、羊と小鳥と小犬と、子を抱く田舎の若い母と(屢々花嫁と)老人と子供とが必ず出てくるといえる程であるが、そのいづれもが集つて、リヒターの平和な、眞率な、敬虔な、牧歌的な畫面を構成している。構成などいつては意が通らない。寧ろ、それらの柔和な、純眞な、謙虚な幻想的な風物の調和の世界に、リヒターの藝術が、自分でも氣のつかない靜かた息をしているといつた方が當るであらう。だから、その中の「子供」についても、子供の生活の寫生というよりは、かすかな象徴性を以て描かれていることが感じられる。但し、その象徴性が觀念的な假象ではなくて、美學上のホホジンポリツシュであることはいうまでもない。すなわち、リヒターの子供は、箇々としては子供の如實の姿をもちつゝ、(そこにリヒターの兒童畫家たる力がある)畫中にあつてそのこゝろをあらわすのである。彼がリヒターを敬重するのも此點にある。こういう藝術にめぐりあわされたことは感謝すべきである。

## 2 カール・ラルソン

藝術による幸福は廣い。リヒターとは全くちがつた型の兒童畫家カール・ラルソンの畫集 *Das Haus in der Sonne* (「日なたの家」)にめぐりあつたのは思いがけない幸福であつた。眞にめぐりあつたといふたい。それまで名も聞いていなかつたのが、一度會つたら、まるで一見舊知の如しであつた。初対面といつたあたらたまつた表情なんか少しもなく、たゞにこゝと、すぐに心の奥底まで氣のあう間になつた。こんないゝ畫を紹介してくれたのは友人菅原(教造)であつた。そうして教えられて、丸善に注文して此の畫集を取りよせると共に、彼が編集しはじめていた「婦人

と子供』(後の『幼児の教育』)第十二卷第一號に、くわしいラルソン紹介を書いて貰つた。以下その文の中からあつちこつちと抜すいさせて貰う。

『ラルソンは今年(明治四十五年一月)六十歳で、スウェーデンに現存している大家である。ストックホルムで生れた人で、やはり其處に住んでゐるけれども、春から秋にかけてスウェーデンという田舎の別荘へ一家をあげて越して行く。そして此のスウェーデンに於ける自分の家族の生活の様子を、美しい水彩畫と輕妙なエツチングとに寫生し、これにラルソン獨特の美文で説明を附して、明治三十二年から四十三年にかけてストックホルムで出版した。』……

『子供を畫いた繪もいろ／＼あるけれども、ラルソンほど數も多く變化のさまざま／＼な繪を畫いた人はない。子供を畫いた繪もさまざま／＼あるけれども、ラルソンの繪ほど形式と内容と、即ち畫き方、線や色や光線の表はし方と、繪に畫いた子供のありさまとのよく調和した繪は餘り多く見受けられない。』……

『デンマークの畫家は十九世紀の半頃迄、其國丈けに止まつて世界の舞臺に出なかつたけれども、スウェーデンの畫家は十八世紀において既に歐洲の藝術史の一角を占めた。

現今では世界の大家として有名な人が澤山ある。中でも小兒畫家ラルソンは最有名人である。』……

『ラルソンは近代のスウェーデン藝術家の中でも、子供の心を持つて居る唯一の人である。彼は純粹のストックホルム人である。彼の藝術は彼の人物の如く快活で、輕易で、且つ陽氣で、しかも向けんらんたる裝飾的な味わいがある。又彼の繪は清新で、若々しく、そして絶えず暖かな、にこやかな心情がこもつてゐる。斯くの如き感情のありのままの且つ直接の表出というものは……スウェーデンにおけるラルソン自身の家の家族生活、即ちスウェーデン風の木造家屋の内外の有様、及びブロンド色の髪と青い眼の彼の家族の肖像や活動などを畫いた畫集四冊に十分示されてゐるこの畫集をひもといて見る人は、恍惚としてラルソンのような人物になり、ラルソンの畫のような精神になり。淋しい心も憂鬱な情も、この繪本のためにおのづと暖かに暢びやかに開いて、善と美と喜びとに充ち溢れる。實に畫人たり詩人たるラルソンが幸福なる家庭の愛の生活を語るものは、此の畫集である。』……

ラルソンの幸福なる家庭の愛の生活を構成してゐるものは、父ラルソン、母カリン、男の子ウルフ、ボンツス、女の子スサンネ、エブシヨルン、リスベト、ブリタ、ケルスチの九人であり、それがラルソンの畫の中に出てくる。それも、よそいきの氣どつた身なりや顔つきではなく、ふだん着(或はねまき)のまゝ、いつもの顔(大抵はふざけて

笑つてゐる顔)で出てくるのである。その場所も、食堂、寢室、子供部屋、臺所、庭、そしてラルソン自身の畫室といつた、ほんとうにうちのなかである。一枚の畫に、その畫室で、おやぢのラルソンが、禿げた頭の上にブリタをのせて、地藏眉の下の優しい眼を、眼鏡をはづした爲かいと細くして、しわくちやの黒地赤裏という仕事服で立つてゐるところがある。どれもそういつた調子である。その他、此の小兒畫家の畫いてゐる子供は、自分の子ばかりである。

彼がラルソンにおいて、特に興味と親しみとを感じたのも此の點であつた。自分の子ばかりを畫いた小兒畫家というものは他にあるまい。我が子をモデルにすることはあつても、モデルの中の一つとするだけで、他の子どもを畫かないのではない。それが、ラルソンにあつては、小兒畫家というよりも、我が子畫家である。これはラルソンとしてどういふ理由乃至理屈があつたものか知らない。又、これは「小兒畫家」として物足りないことだという人もあるかも知れない。しかし、彼は、それを何ともいえず面白がつた。何んだか心憎くも思つた。(ラルソンには、心憎くいといつたようなことは聊かもないのだが)。何はともあれ、彼とは年齢が倍もちがう此の老畫家を、尊敬を飛びこして、いきなりに親愛して仕舞つたのも此のゆえであつた。

兎に角、ラルソンは、子供というものを畫こうとした理想主義小兒畫家でなかつた。子供以外の題目のために子供を畫く象徴主義小兒畫家でもなかつた。子供を繪にして藝術の子供に酔おうとする小兒畫家でもなかつた。従つて何かの標準で繪にする子供をさがす小兒畫家ではなかつた。——勿論、そういう小兒畫家から、多くの貴いものを與えられる感謝を忘れてはならないが、そうでない小兒畫家ラルソンからも、彼は極めて貴いものを與えられたのであつた。子供というものについてとなく、この子、その子の徹頭徹尾具體の一人々々の子がそのありのままに繪であることとを。

一方にリヒターを、一方にラルソンを。——多幸な彼は、どうしてこうも偏りなき教えを受けたものであろう。

### 3 『コードモノクニ』

子供を最もよく觀るものは藝術家である。そのすぐれた表顯を通して、子供を學ぶのが「繪の子供」修業である。しかもその修業をつゞけてゐる間に、彼のいつも思うことは、自分にも繪がかけたらということであつた。子供をほ

んとうに観ることもむづかしいが、子供を表現することは尙むづかしい。心理學の學語ではなま／＼しさが出ない。といつて平凡な散文ではいき／＼しさが出ない。子供、というものを抽象的に何んとか語つてみることはできて、子供の生活を浮彫りすることも、フォーカライズすることもできない。そこで子供の生活の具體のモメントを活寫した古人の和歌や俳句や詩を、さも自分の作のような氣になつて口づさんでも、うまいもんだなという感心だ邪魔になつて、自分の子供にならない。といつて、そつと自分で一句やつてみると、まづいなと思つばかりでいよ／＼以て自分の『子供』が詠み出されない。それに、表現の不完全はまあ仕方がないとしても、文字による限りどうも觀念的になつて困る。遊ぶ子やとか、子どもかなとか詠嘆顔はしてみても、一寸洗つてみれば理屈のかたまりで、『論文の子供』以上、何んら『詩の子供』にならない。いゝかえれば、あるがまゝの具體のその子でない。一茶やスチーブソンでは、流石に子供が目の前に見えてくることがあるが、彼の俳句や和歌では、詩の形で實は子供を想つてゐるに過ぎないことが、いつも我れながらもどかしかつた。彼が自分にも繪がかけたらと思つるのは、そういう時であつた。

勿論、實に勿論、彼には繪がかけない。そ、繪のかけない彼が、『繪の子供』を鑑賞するばかりでなく、兎に角にも見せる方の側に立つて『繪の子供』の製作の經驗に觸れることのできたのは、幼兒繪雜誌『コドモノクニ』の編集顧問になつてからだ。そうして、當時の著名の小兒畫家諸君と共にしたその仕事に、彼が興味を傾倒したのも當然であつた。但、顧問というとさもためになる人のようだが、まが若い彼にとつてためになつたのは、自分の方であつた。毎月執筆の畫家諸君は、いづれも後の錚々たる大家の若い時代で、清新潑瀾の畫筆と共に、良心的幼年繪雜誌の先驅者としての意氣の所有者のみであり、企畫にも、檢討にも、相互批判にも、非常に眞劍であつた。その編集會議が彼にとつて大に有益であつたことはいふまでもない。その場で語りあわされることは、すべて『繪の子供』を畫く苦心であつて、畫ける彼が時たまに口ばさむのは、子供たちは何を見、どう遊びたいのでしようかということだけだつた。つまり、もの言わない『繪の子供』に代つて畫家諸君にお願ひするだけで、子供當人が、どう眞實に畫き出さるか、諸君に信頼していればいゝのだつた。子供に見せる繪本で、何がいけないといつて、眞實に子供の心をもたない子供ぐらいいけないものはあるまい。それは子供の繪ではあつても、『繪の子供』とはいえない。これがお前たちだよといつて見せられて、子供たちがさぞ面くらうであろうからである。しかも、そんな時そんな心もちをする

管のない子供の顔や、年齢を無視した子供の身体が、美化にせよ醜化にせよ、平氣で畫かれていることが少なくない『ゴドモノクニ』ではそれが嚴密に注意せられた。

彼は『ゴドモノクニ』の編集に参加したお蔭で、子供の見る美しくすなおな世界を、若き清水義雄君と、共に見た。子供の住む楽しい想像の世界を若き武井武雄君と共に楽しんだ。同時に、美しく楽しい子供そのものゝ生活を若き岡本歸一君と共に………畫いた。これらの筆の人と共にというのは變に聞えるかも知れない。殊に岡本歸一君と共に畫くとは、あり得ない以ての外のことゝ聞えるでもあろう。しかし、彼は『ゴドモノクニ』では、どこまでも、『繪の子供』を作るために、これらの美術家と仕事を共にしたのであり、従つて（？）當時の子供たち（後の父母たち、祖父や祖母たち）に著名な岡本歸一君の『繪の子供』を、自分が畫けたら畫くであらう『繪の子供』として愛したのであつた。岡本歸一君は、生れながらの小兒畫家といつた人柄の人であつた。虎を畫く名人が虎のような人という譯ではなからうが、小兒畫家はその人柄であることが條件らしい。リヒターがそうだ。ラルソンがそうだ。彼は岡本歸一君の月々の作品を愛すると共に、是非後世に傳へるような大作を畫いて貰いたいものだと思ひもし、岡本君にも常に話した。その志は必ずあつたであらうと思ふが、早逝された。幼年繪雜誌が非常に多くなり世の注意をひくようになつたのは、その後であるか、彼は當時の良心的な『ゴドモノクニ』と Kitchi のサインを常に思ひ出す。そして、單に名畫を觀賞するとは別の側からの『繪の子供』の修業の機會を與えられたことゝ、理想的幼年繪雜誌というもののえの夢を抱く初めをなしてくれたことについて、彼は此の最初の經驗に感謝を感じている。

子供を、その生活のまゝに直觀したい。その直觀のまゝを把握したい。子供の研究が其の前のことか後のことか分らないが、子供の教育は、たしかに其の後のことである。子供を把握することなしに何れの教育ができよう。しかも、それは、教育のための兒童研究によつては得られない。子供のための兒童研究でなければ得られない。幼年繪雜誌の誌は、子供に子供を與える仕事である。子供を教育しようというよりも、子供を満足させようということとは、幼年繪心である。そのために、その頁々には『繪の子』が活躍していなければならぬ。子供を教える前に満足させる仕事の經驗を若い日にもつたことは、彼の大きな幸であつた。